



地域コミュニティと大学

林 英輔

麗澤大学教授、同情報システムセンター長
NPO柏インターネットユニオン 副理事長



CAUAシンポジウム2003 京都



1. 地域と大学の関係

私の所属する麗澤大学は千葉県柏市にあります。麗澤大学の2003年の入学式で、来賓の柏市長が挨拶の中で大学の地域貢献についての話をされ、「柏インターネットユニオン」(以下、KIUと略す)^[1]の活動を賞賛して下さいました。KIUは、麗澤大学の教職員と学生が参加しているボランティア組織で柏市の学校ネットワークを運用管理を行っており、1997年に任意団体として発足しましたが、2001年にNPOとなりました。

こうした柏市長のお話などから、どうも大学の地域貢献が、地元から大変期待されていると感じています。そうすると「地域にとって大学とは何だろう」と考えざるを得なくなります。

KIU以外にも、最近大学生の地域貢献活動がいろいろと報道されています。関東地方でいうと、東京都八王子市にある東京工科大学で、学生が小中学校のパソコン授業の支援を行っているというニュースがありました。

また、千葉県浦安市にある明海大学では浦安市と協定を結び、学生ボランティアが情報教育や福祉活動の支援を行っています。情報活動の支援は、小・中学校の情報教育の助手を務めたり、先生方の相談にのったりという活動です。福祉活動の方は老人ホーム等に出向き、ご老人のお世話をする活動だそうです。

大学本来の役割は研究と教育ですから、そうした点から地域の役に立つことといえば、地元の学生を教育するとか、大学の研究が巡りめぐって地元役に役立つという程度です。さらに広く見れば、青年住民を増加させるとか、文教環境を形成するといったこともあるでしょう。また、大学の教員が学識経験者として地域行政に色々な知恵を

出すことは昔から行われてきていることです。

しかし今、大学に期待されている地域貢献は、もっと広い範囲のものと考えざるを得ません。地域の教育、文化、社会、産業活動などに対して、特に地域の活性化に対して大学が貢献して欲しいという要望が強いように思われます。

一方で、地域の広い意味での社会活動、文化活動、教育活動という中で大学教育の対象は広がっており、学生だけでなく地域の生涯学習の支援をするようになってきています。大学は少子化傾向で入学者がだんだん減っており、余力を生涯学習の方へ向けて大学の役割を果たしたいという動きです。

地域の経済、文化、教育と様々な面での大学の貢献活動が始まろうとしていますし、地域のほうもそれを期待するようになってきています。

2. 地域と学校の共生

大学ばかりでなく、小学校から高校までの学校と地域の関係についても、このところ再検討が行われています。

その背景として、一つには「開かれた学校」の論議があり、一つには最近の学力低下問題の議論の中で盛んに言われるようになった「地域の教育力」の問題があります。また、地域の活性化で、町づくり、町おこしというときに、学校との関係でいろいろな議論がされています。学校の立場で言うと、学校と地域の共生をはかる、地域の教育力を高める、ということはすなわち地域にある家庭の教育力を高めるという方向付けが課題となります。

「開かれた学校」というのは古くから議論されているテーマです。コミュニティースクール論は学校を地域改造の中心機関と

して捉え、子供や大人を地域社会活動に参画させながら学校と地域社会の緊密な相関を図ろうとする理論です。欧米では大恐慌の後の疲弊した都市社会の混乱の中で議論され、展開された活動です。

我が国には戦後の混乱期にこの考え方が導入され、その後「開かれた学校」の必要性が昭和62年に臨教審の第三次答申で初めて提起されました。その後中教審に引き継がれ、平成8年の一次答申^[2]で学校を中心に学校を開き地域に貢献するという提案がされ、平成10年の最後の三次答申では地域活動の拠点としての学校の役割を見直そうという答申がなされました。

こうしたコミュニティー・スクール論の一番新しい展開は、金子郁容氏他が書かれた「コミュニティー・スクール構想」^[3]です。コミュニティー・スクール論をさらに一步現実に進める為には、教育の情報化を進めることと、ボランティア活動を背景とした開かれた学校、自律的学校を目指すべきという主張をしています。最近の教育特区構想などではこの考え方が活かされているようです。

「開かれた学校」のよい例が、最近、総務省の調査で入った千葉県館山市の神守小学校というところがありました。ここは地理的に不利な地域で、そのことを住民も行政も強く意識していて、そのためもあってか千葉県内でも教育熱心という評判が立っていました。自治体は地域情報化にも非常に積極的ですし、古くから草の根ネットワークの形でインターネットの活動がボトムアップで持続的に行われるなど自律性の高い地域でもあります。

地域の保護者の願いは、学校と地域が一体となり情操豊かな児童の育成をすることで、学校側は新しい時代を創造し生きる力を持った生徒の育成を目的としています。

それらを一体化し、お互いに認識し、共通理解して子供を地域の中で育てるための様々な活動を学校と地域が一体になってやっています。

神守小学校は明治7年開校の歴史ある学校ですが、山間のため人口が減っており、閉校や合併の話が昭和50年代からありました。部落住民は、そのような環境の中であえてスモールスクールの振興運動を始め、その結果、市を巻きこんで2002年に新校舎をつくり、地域イントラネットワーク基盤整備事業によりインターネット接続環境や校内LANを整備しました。



図1. 館山市立神守小学校全景

神守小学校の新校舎は少し変わっています。誰でも階段から2階に上がれるようになっていて、2階の廊下もオープンで誰でも各部屋にアクセスできる仕組みになっています。セキュリティ管理は部屋ごとになっていて、鍵さえあればどの部屋でも入れます。学校側と地域側がそれぞれ鍵を持っているので、たとえば地域の女性方が家庭科教室に入り料理講座を開いたりできます。

2003年には神守小学校と地域の連携活動がかなり活発に行われています。パソコンクラブでは地域住民と児童と一緒にパソコン操作を勉強しています。さらに「神守探訪」といって、地域の大人に指導されて児童がいろいろな場所を見学に行くという地域学習を行っています。南総里見八犬伝は

フィクションですが、その舞台となる背景があるので、それを勉強することもあります。学校が地域活動の拠点になると同時に、生徒と地域住民が一緒に勉強したりしています。

こうして見てくると、神守小学校の事例は新しく導かれた「解」でないことが分ります。昔から地域において学校教育をどうするかということを、住民と学校は一緒になって考えてきました。いまさら学校解放と言わなくても、古くから行われてきたことなのです。私たちがこれから何をするべきか見直す良い事例だと思います。

地域、といっても人のつながりで言うと地域コミュニティーですが、地域の教育力を回復する必要性を感じています。かつての日本には地域に教育力があり、学校から帰った児童たちは地域でも大人たちに教えられていました。それと同時に地域を構成している家庭の教育力も回復する必要があります。戦後の日本経済の発展がもたらした結果でしょうが、労働人口の都市集中にともない核家族化や女性の社会進出が進み、「鍵っ子」が生まれたのが今の大学生の親たちの世代です。今の大学生の親たちの世代は、地域や家庭に教育力のあった時代を知りませんから、今日の様な教育力の弱体化という状況が生まれています。地域コミュニティーの教育力をどのように回復させるかというのは重要なテーマです。

ただ、今では近所づきあいも少なくなっていますし、どうやって地域でコミュニケーションを図るか問題です。我々は大学でネットワークを教えていますので、「ネットワークは地域のコミュニケーション回復の強力なツールになりうるか」という質問に対しては「イエス」と言いたいと思います。

一方、学校としても、地域に対してどういう教育をおこない、今後どう運営してい

くかということを説明する責任があります。学校が情報発信力を持つことが地域から望まれていて、その方法としてのネットワークが重要になってきます。

3. 地域の教育情報化と大学支援の可能性

1990年代からの潮流として、教育の情報化が進んでいて、児童生徒の情報活用能力の養成、情報学習の強化が進められています。また一般教科の情報化も強化される傾向にあり、ネットワークによる学校と家庭の交流が求められるようになってきています。

KIUを始めたのは、日本のインターネット黎明期に、大学にインターネットアクセスを普及する活動をした人たちです。インターネットを大学から社会に広める活動を始めるきっかけとして、学校にインターネットを繋げようというのが、そもそもKIUを始めた際のアイディアでした。

学校で情報教育をする際にネットワークが切れて使えないことがないように、お手伝いをするところから始めましたが、実際にやってみると地域支援活動だけではなく、そこに学生が参加することにより教育の場と機会が得られています。麗澤大学は座学ではLANプロトコルなどをしっかりやります。しかし、文科系の大学なので実習の授業は限られている状況です。そこで、実際に物に触れ、耳で聞いて知識を確かめる反復学習の機会としてネットデイを捉えています。アナライザ等を持ち込み複数のLANプロトコルのテストを行いますので、それが勉強になっています。

ここでネットデイの様子を少し御紹介しましょう。

KIUには学校ネットワークをつくるネットデイの実績が30校ほどあります。「ネット

デイ」とは単数ですから、本来であれば1日でできるという意味ですがなかなかそうはいきません。学校の中は、職員室と教室のネットワークを別にしないと、先生の成績ファイルの所在が見えたりすることがあるので、何系統か独立配線をつくり、情報コンセントを教室系と職員室系に分ける必要があり結構大変な作業です。

KIUの場合では、まずリーダーを中心とした学生達が現場の設計をするために学校の下見をします。大きな学校ですと3回ほど通って設計図をつくり、材料を調達します。そして何回か事前工事を重ね、最後の工事日をネットデイと呼んでいます。

ネットデイ当日は、まず開会式で校長先生がご挨拶をした後、リーダー役の学生が工事目標とスケジュールを説明して、大人たちに指示を行います。その後小グループにわかれ学生中心にブリーフィングと呼ばれる打ち合わせを行い、現場へ散っていきます。学生が大人に指示したり、協力したりして工事を行うわけで、学生にとっては貴重な体験の場であると共に、学習の場となることは先に述べた通りです。

また工事の前に、学生がケーブルにモジュラージャックをつける講習会を先生に行うこともありますし、工事後にボランティア講師と学生助手のコンビで先生方にインターネット講習会を行うこともあります。

ネットデイの参加者は、大学のゼミの学生とKIUの会員で40～50人程度、学校のPTAの人たちがやはり40～50名程度で100名前後の規模が多いようです。KIUのネットデイの特徴はやはり大学生の参加者が多いことにあります。

KIUは最近ではネットデイでばかりではなく、教育現場で教育の情報化を支援をする活動も増えています。学校に学生を派遣しソフトウェアをインストールしたり、壊れ

たパソコンを直したり、学校の授業の助手をしたりしています。これらの活動はSLA (School Lan Aidの略) というもので、出来上がったLANの運用支援をする目的ではじめたものです。最近では柏市以外の周辺自治体の要請にも応じるようになり、教員のIT講習会やWEBの代理作成、運用技術の相談など、支援内容も幅広くなってきました。

現在は教育の情報化の支援が主体ですが、この分ですといろいろな分野で支援ができそうです。例えば地域の生涯学習の支援や、場合によっては地域の行政の支援などです。行政の支援といっても今までの学識経験者のようなものでなく、さらに具体的なものです。実際に麗澤大学がつくった教育用の広域ネットワークシステムの設計仕様が行政に活かされたことがありました。

大学の場合、学生の教育に地域学習が使えると全体としてうまくいくので、私たちも学生の教育の場として位置付けています。先ほどのネットデイでは、学生に挨拶の仕方から教えます。そのように社会学習になるので、地域貢献を教育プログラムとして位置付けています。さらに大学のカリキュラムの上で位置付けをしていこうとしています。

最初に紹介した東京工科大学や明海大学の例では、学外実習2単位で地域貢献そのものを大学のカリキュラム上で位置付けをしています。これは広い意味でのインターンシップとして想定している場合が多いようです。麗澤大学では地域貢献学習はインターンシップとは区別しようとしていて、地域貢献学習2単位とする方向で準備しています。そのためには大学と自治体の間で協定を締結させる必要になります。大学から学生を派遣する場合、事故やモラルハラスメントが心配になりますし、交通費や昼食

代などの経費負担の問題もあるからです。

4. インターネット時代の学校図書館

柏市では、学校図書館の活性化にも取り組んでいます。たとえば柏市の小学校では朝の授業が始まる30分前に、有志のお母さん方が本を読み聞かせる活動をしています。親が絵本を読み聞かせることで、幼児に本への興味を持たせ、児童が自分で読書をするようになるプロセスを回復させることが目標です。

また教育の情報化の中で学校図書館のIT化が遅れていて、KIUでは学校図書館をネットワークで繋ぐなどのサポートをしています。司書教諭という制度ができましたが、本に関しては詳しいけれども、ネットワークは分からないという現状です。こうした取り組みにより、司書教諭の役割が学校の中で拡大し、情報担当教諭と一緒に図書館自身の情報整備をしたり、電子図書館化を進めることが可能となることを期待しています。この先に地域図書館があると思いますが、地域図書館は全国的な中核図書館と連携することにより、地域の知的水準を上げることに貢献するようになるでしょう。そして、このスタイルのコミュニケーションツールは、やはりネットワークになります。

これから先、ミュージアムやギャラリー、文化施設などが整備されていきますが、その情報化についても大学が役割を担っていく必要があると思っています。

5. まとめ

大学は、少子化の影響で、学生を集めることが難しくなってきました。そうした中で大学が生き残る為には、大学が地

域に対して魅力的なものであることが必要です。地域に信用のない大学に、全国から生徒が来るわけがありませんから、地域に貢献することにより地域の信用を得ることで大学が成り立っていくと考えています。大学が生きていく為にも地域貢献が不可欠であり、そしてその貢献の幅を広げる試みをしていくことが求められています。

私たちはまず自分達から始めようと、千葉県柏市から始めた地域貢献活動は、周辺の市町村に広がり、やがて館山のように千葉の反対側まで出向くようになりました。東京都墨田区など県外の学校のネット構築もするなど、その活動はだんだんと広がりを見せています。

[1] 柏インターネットユニオン

<http://www.kiu.ad.jp/>

[2] 中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuou/toushin/960701.htm

[3] 金子郁容、鈴木寛、渋谷恭子「コミュニティ・スクール構想 学校を変革するために」岩波書店(2000)

2003年11月28日

「CAUAシンポジウム2003京都」講演

書記：CAUA事務局 滝島繁則